

近江輿地志畧

二十

冊數	番號	部門
一 六	四	三

舊本存水久

巡江輿地志畧卷之八十一

膳所 寒川辰清輯

坂田郡第

一

辰巳村

乾村ひやく ひやく村ひやくむら

一

下坂莊

下坂中村しもさかなかむら 佐村さむら 高塙村たかつきむら 成吉村せいぎむら 松上中村まつじょうなかむら 云

一

亨白村

中村なかむら 亨白けいはく 坡ほ 一 久田くた 有あり 乃山のさん

葉は 坡ほ

中村

乾村ひやく 亨白けいはく 坡ほ 下坂中村しもさかなかむら

不新之院

中村なかむら 乾村ひやく 亨白けいはく 坡ほ 有あり 京智惠きょうちゑ 坡ほ 有あり 元名元

庚午年天星実道和昌ノ三事

一 ち橋村 中村のやあくらむら

一下坂宿 ち橋村の竹々村

一 良時寺 下坂宿 ち橋村の御宇賀酒(夙京妙心寺の末  
ちう)竹入道山道傍に是屋(豈)めち北条(源)氏等

岩乃地

一大原井 村井田村枝戸村四一曾村鳥根村小四村写田

村上支馬下支馬村治下村市陽村中村かた村(書村)

一 村井田村 成ハ村枝上竹子春近松(籠)翁(竹)子東南(竹)也

アサム

一 八階社

一 天王社 佐々村井田村(竹)子(竹)山(竹)神

一 皇后保

村井田村(竹)子(竹)山(竹)保(竹)天皇(竹)後(竹)也  
或(竹)皇后(竹)法善(竹)子(竹)四十(竹)年(竹)不(竹)破(竹)保  
寶(竹)玉(竹)石(竹)保(竹)内(竹)天冠(竹)子(竹)保(竹)天  
以(竹)保(竹)え(竹)ゆ(竹)から(竹)お(竹)と(竹)日(竹)場(竹)子(竹)を(竹)  
明天皇(竹)御(竹)昌(竹)の(竹)事(竹)一(竹)延喜式(竹)昌(竹)の(竹)事(竹)

を(竹)

延喜式諸陵寢曰惠長墓(神明天皇之祖母名日廣姬)

在近江國坂田郡北城東西一町南北一町守戸三烟き

一  
坂戸村 村井口村東少く有り

一  
井口村 坂戸村乃下少く有り

一  
葦刈 井口村有り

一  
姉川 源の加波川有り甲津留曲谷吉櫻坂並  
久保乃西と唐て盤曲しても波と小内井口村の山  
河野河也始して姉川より龍巣山圓山乃大木立草  
地川と合し國石川と名す井口細い山の山と曰河  
及馬原川と合し一派となり入三国傳記曰せ尾の  
伊多尾川行はゆきちあゆの堀女達にの堆もあく

一  
御海ノ移ふて國ノ大王の姫の毛の極河ありて姫川  
と是をよし川と呼女とよぶり西淀脅清原風と  
たゞさうりや大是石の流れとてあるが修辭  
恰山ニ毫の晴りかくは中ノ毫の水深處とも  
波多と乱れりは因し水行つゝ事と極く是多  
を落す——豆河毫つの三段と云ひ其はくも千余方  
舞の波はくられ石と能て云ひてよしよし  
貞は辛キ也多きの是上人一夏九旬の方もく  
伎手引て六犬無碍す源氏と傳へ云葉平手か持  
てなく盤石係り初沈没して多くて忽ちこの間

元怪事の記多々 捧用（さけんよう）さるすまえ 之龜之度  
辛の年攝山佐多郡井長政が金義室（かなよしむろ）とたまふ 姪川  
金城（きんじょう）とまらまと 姪川赤八亞孫川の文子と修治姪  
川金城と 東郷神君を祀り 全く信せる  
利口（りこう） 神社の成功（こうこう）

野一色村 丹波村の山ノ木村

高石太田の神社堅正三社（かねまささんしゃ） 丹波村の高石神社

鳥脇村 坚正三社の高石神社

一小田村

堅正三社の高石神社

一

八幡神社 小四井（こよい）

一 同四井 小四井の名す

一日圓津社

方圓社（ほうえんしゃ） 乃至是神之社（のぞひははじめのじやうしゃ） 諸御圓の神社

名

一 上支馬村

鳥籠村の高石村の上支馬村

一 虚空院寺

上支馬村

一 下支馬村

工事の高石村の下支馬村

一 土社桂院社

工事の高石村の高石村古昔有御社

一 八幡神社

ワキマツ

一 沼下村

沼下村の高石村古昔有御社

事にゆづ下す行ひとまくらの名と名く

一此夜又池 シテモトロヒテハナリタマ一町四方ニ  
土俗古傳古事記傳本多義池中ニ水をも事と云  
ヒヨシトモ人少女と生タリニ名ト理ノ水神  
テラハ水たより一ト多義タヌル比夜又即名  
生多義水名ニ況入リおて入リ一枝の口トモ  
ゆゑ多義水也一ト後此辛ニ御水以東女水神  
多義千人ノ屋敷池の説ニヨリ引ク者必也有  
様ナリト破トシ

一三傳古傳神社 シテモトロヒテハナリタマ五傳至之傳第凡八

舊主椎根津彦令とお殿と之神是紀曰竹木屋之主義  
原野村ト活候 一傳至の國ニウツノ事ニ之傳の神と信  
仰 一傳家め運がハリシモリ百日未満セリ活候  
欲一ト後事無事ハリシカ活候トモリ干川之磨之甲  
辰年四月二日 一每年神事四月三日恒例トモお殿  
モリスル又椎根津彦令ハ古事記傳本多義  
一辨跡天社 ハリ村の傳玉ワリ古竹木屋本多義  
保之平治の後ト破モ古事記傳人保と如て指

計 一 原谷左司主同ノキ多義人保と如て指

宿すより久しく、未至に候と申すが承取は  
初詣を終り後参り仰候事也

一夜及女墓 はゆめまゆ申ニ於神社只因り信老の  
女ねの下りて若くして文字を多くいはす木の樹  
を比夜及女木とも云之

一白山社尾社 因村一

一長禪寺 因村一  
院破滅ニテア慶長辛卯ノ日下家次少輔と建之  
左尊ヒキムシヒテ棟札曰 不勤明王者白和州室  
生山當長禪寺令迎請之則室生舍利入水精之立  
輪納尊體之胸界雖然歲霜推移而欣像為俟滅  
今令諸佛師造神木尊建立一字御堂而奉安置之  
所爲宗童如件

の國宝生山寺ノ迎來レシテ叶遣リ世ノアイノ寺  
院破滅ニテア慶長辛卯ノ日下家次少輔と建之  
左尊ヒキムシヒテ棟札曰 不勤明王者白和州室  
生山當長禪寺令迎請之則室生舍利入水精之立  
輪納尊體之胸界雖然歲霜推移而欣像為俟滅  
今令諸佛師造神木尊建立一字御堂而奉安置之  
所爲宗童如件

江洲平方佛工法眼敬白

慶長十一年丙午十二月十三日

頼生日下家次敬白

一 市場村 產所村ノアノムニ村

一 藏王權院社

若々ハ幡立社ミ市場村ニ有

一 中村 市場村ノモイモツ村

稻荷明神社

神明社 保ノ中村

木庄村 木ノモ面ミ村

天滿天神社 木庄村

高畠村 木庄村ノモトウチノ村ノ木ノ里セツツ  
大梵天王社 高多村ノリノ玉俗名傳音天恩主神又號く

社座ノヒタシトシ

春照村 マホノミコトモミモツ村

若宮 春照村

稻荷大明神社 口村

相模庭村 丹口村ノモニモツ村

産所村 上馬村ノモニモツ村

柏原莊 伊勢村久保村益川村板蓋村上野村 大清

水村松井村 沢川村大野村柏原村樟山田村 長  
名寺村柏原村 柏原村御内村御内村御内村

久保村柏原村 水村水村水村水村水村水村水村  
水村水村水村水村水村水村水村水村水村水村水村

はら御住不近に國故原序と云  
一伊吹村 玄龜村の少よりて伊吹山面の山麓をも  
他村すむる地形たり

ほり細き寫集

男すみりて山川獨見だれ伊吹乃イヒトロはけ  
一伊吹山或と勝吹すくと伊扇支也。セモ山乃ミテ  
晴天とも山上より遙に國信農駒ヶ嶽すくアサリ。おほ天  
台の山神代子の嵩山すくて宝鏡を形容すくシ  
畠信用もすくよ里すく山南を西山ト以て背と  
一酒勧堂 施頂スリ。酒勧善菴の石像。何人の化

とす年をも

後拾遺集

実方朝臣

かくにまちやハ伊吹乃ミーもをすもあくも分ふゆ  
新古今集

和泉式部

多事又びや伊吹乃ミーもあくも分ふゆ

達保百角

行花

秋もすそゆく伊吹乃山風とあれもかりし廉乃伊吹

續古今集

多深く野をかすり血江すく伊吹乃山雪ぬど

尾家

秋色や、色あたる事す。伊吹山より、今更下乃思ひし

建深石窟

卷之二

子はや車より五事と旦渡せり伊勢乃名をかふ村重

四

卷之三

御山のやうに伊吹山より草木やうに山の出る月  
寺ヶ嶽 伊吹山面正とまことに二十町餘ありておはり侵入  
者ありて呪駆し御墓菩薩隆慶山にて御座候事有而  
ノ獄少佐有りて朝、芝障と鬼神有りて曰伊吹山西南  
の村又伊吹乃村也、郷の少主伊吹明神鎮座矣と  
東南より引石の方へ固く里なり、萬物と云ひ往者と

繁昌乃地く東永のけをてらるは壞の佛像移玉  
今冬、荊棘生茂で蒸艸ノ石像のより、あらうり  
りて上節のくまも、民家二軒の村々に一権にす  
てはこのまゝよつてのづけには勧善の壁あり  
げうみて左脇を渾ひ此山極下四五步の内、松柏生茂  
えど、上うち竹叶をみしめ、如漢ノ名曰何くも  
蓋多彫々し強劫禪定の人のみがこそ茎竹をかん人  
事あると高志四月乃初、八月乃後、登山の諸人  
修(上墨)テ、イ町より上て、小鳥のとて、石壁  
ア掘り、えど、竹叶にて、輪跡陽とてある不の

山と野跡の跡ありと見ゆれ事と雖て  
大手とちる山にて上野の二人がりと御子て  
菜大根草を三町程迄燒ヤシの地に信ひて自ら乃  
收化せ是よりけ山女人活戒式の所にて村ノ婦女等と  
之をも見よ山は登る所すと申す者ま人乃是れ年を付  
登山して山ノセらみ登る所とからかひの所の邊今更に  
苦惱のあすゝ巖イシて多くかくふかうの所の邊今更に  
まづ岩をよしと見てて所す二十丈许の石崖あり  
之を門のりて山石とみりしと上山處ナカニ一邑而と接り  
如一山なり勢い曲くと巖壁イシガタとて至形の開け

崎路之上に高頭山動乃處而も一方四角一面正と  
左の山に樹木立らず夜風ニ吹くとそれ刈施植樹のやう  
中歩く石檻イシハシにて石室イシヌマあり石像イシザイは動安坐する塔  
あり石乃室塔イシハシタ守經塔イシケンタあり雪イシと拂イシて此  
を計る所と謂ひ乃ち了以ゆくことの所は定法拂イシヒビ  
之未の先後度の日以テ不<sup>レ</sup>持久一トモ遠方難<sup>レ</sup>長  
嘗<sup>レ</sup>お化けのん地とぞせりとよひて山の山形を表し  
也セ乃岩が風氣人形のあつりゆきし山事乃道  
也セ乃山が風氣人形のあつりゆきし山事乃道  
岩窟イシカクの石佛乃と考へ三策めつ不<sup>レ</sup>持久一トモ

廣葉院正三ノ寺四所院上は立ち古碑か三朱門  
乃は是寺寺ノ七重伽藍ノ天体也といふ事正元寺  
乃は大丈が川て佛宮院房乃祐也く禮乃く禮乃く故  
毫乃石を丸もとし北邊乃百姓竹林川寺と別れ仙  
浦山寺等此處也本有之也而乃谷川寺と曰て也  
聖院川と子根元石をとそも大山乃瀬とす也て也  
而乃もハ清水岩をあり西乃岸ノ清高寺也云  
寺也を堂泥家ち家四野遠隔石也川上流之河谷高  
て名風林乃山也乃はち乃觀音山とも說焉寺也云  
ち乃祖寺山の山地樹泥糞也一楓樹の乃木ニシの也

少小樹也乃兒年と不至也正乃善本也志乃之爲  
よりつる秋乃東紅葉也とらんぬめしはちつ國乃  
山もくすす西ノ御本二町そりは尾ち乃門前也ち  
松風堂の定晏寺也地也乃延寛の也く禮也と在也  
乃萬國乃は極秋也和焉り中興之天祐寺也之不堂  
白山大なりは節を西移以渡海本條の移也延寛也乃黑  
龍先生也乃り門前至家二町伊吹山西乃本後之也  
寺本後之也寺也乃門前也民家二十もも有也也  
加賀縣常立山乃通也乃山乃通也春照乃多也也

六時より草引寺神戸村を出で行ひ因  
住庵寺を過ぎて深手口四町乃水路河戸乃谷と  
上りて右に左に上りて御手こと山中川の形猶如小也此  
時經一五分到寺門上平ち林より上平ち伴吹八ヶ  
寺乃中高音寺のつるぎ寺家十軒を有而北乃尾上有  
京乃坂降乃あやめ上平坂と天宇乃古老石垣  
今之唐松寺もあらぬ道上りて多び川ノ左川乃跡  
到了北野定家久山居乃堵と云已名川の名左川と云  
谷川河乃妙乃義法近いの邊山とゆく秀信所之根  
通し上りて而少しくて翠微を仰大富と云大富

乃處の後も却く是より左岸にて其の九町七曲乃様を經  
てちう門前より先は伊吹山頭の方よりすこし東へ大に  
あまゆる額多とあらんにてちう門前より  
左家二十人より太平うち村より山知のしてて四地ある大  
山乃ま後左九夏乃てヒヨク也ありてお既也と云ひ此  
市上御太半ちよ若々麦を収め度莫ニて民業を営む  
性味高見也留乃ヨウナ畫派中より仕切く隔年又代役佈せ  
て益々仰りのみ多く遠く近い處風色誠とほり  
かづしち乃ち花の中と不空谷より種室の邊よりハ  
鶴鉤場の而より江すが川の懸崖壁ケイエイノ七門と稱す

クニミ湯布乃<sup>アシ</sup>通乃不即<sup>アシ</sup>山喰<sup>アシ</sup>トテ子<sup>アシ</sup>年<sup>アシ</sup>かれ  
己<sup>アシ</sup>給年多<sup>アシ</sup>し然<sup>アシ</sup>復<sup>アシ</sup>乃<sup>アシ</sup>猶<sup>アシ</sup>教<sup>アシ</sup>と<sup>アシ</sup>御生<sup>アシ</sup>て崖<sup>アシ</sup>又<sup>アシ</sup>角<sup>アシ</sup>掛<sup>アシ</sup>  
テ<sup>アシ</sup>ミヒ<sup>アシ</sup>下<sup>アシ</sup>甲<sup>アシ</sup>乃<sup>アシ</sup>鑿<sup>アシ</sup>源<sup>アシ</sup>と中<sup>アシ</sup>了<sup>アシ</sup>仰<sup>アシ</sup>ト<sup>アシ</sup>不<sup>アシ</sup>安<sup>アシ</sup>御<sup>アシ</sup>而<sup>アシ</sup>成<sup>アシ</sup>此  
之<sup>アシ</sup>涌<sup>アシ</sup>水<sup>アシ</sup>照<sup>アシ</sup>下<sup>アシ</sup>ヨ<sup>アシ</sup>ト<sup>アシ</sup>あ<sup>アシ</sup>く<sup>アシ</sup>ト<sup>アシ</sup>ツ<sup>アシ</sup>マ<sup>アシ</sup>人<sup>アシ</sup>を風<sup>アシ</sup>ア<sup>アシ</sup>モ<sup>アシ</sup>小<sup>アシ</sup>和<sup>アシ</sup>  
足<sup>アシ</sup>大<sup>アシ</sup>久<sup>アシ</sup>怪<sup>アシ</sup>板<sup>アシ</sup>は<sup>アシ</sup>キ<sup>アシ</sup>ト<sup>アシ</sup>上<sup>アシ</sup>山<sup>アシ</sup>里<sup>アシ</sup>ト<sup>アシ</sup>午<sup>アシ</sup>馬<sup>アシ</sup>の世<sup>アシ</sup>ト<sup>アシ</sup>大<sup>アシ</sup>道<sup>アシ</sup>ト<sup>アシ</sup>皆<sup>アシ</sup>る停<sup>アシ</sup>  
吹<sup>アシ</sup>山<sup>アシ</sup>と<sup>アシ</sup>毫<sup>アシ</sup>山<sup>アシ</sup>多<sup>アシ</sup>坂<sup>アシ</sup>の<sup>アシ</sup>正<sup>アシ</sup>流<sup>アシ</sup>と<sup>アシ</sup>上<sup>アシ</sup>段<sup>アシ</sup>の<sup>アシ</sup>左<sup>アシ</sup>方<sup>アシ</sup>と<sup>アシ</sup>山<sup>アシ</sup>御<sup>アシ</sup>何<sup>アシ</sup>  
吹<sup>アシ</sup>山<sup>アシ</sup>ト<sup>アシ</sup>毫<sup>アシ</sup>山<sup>アシ</sup>多<sup>アシ</sup>坂<sup>アシ</sup>の<sup>アシ</sup>正<sup>アシ</sup>流<sup>アシ</sup>と<sup>アシ</sup>上<sup>アシ</sup>段<sup>アシ</sup>の<sup>アシ</sup>左<sup>アシ</sup>方<sup>アシ</sup>と<sup>アシ</sup>山<sup>アシ</sup>御<sup>アシ</sup>何<sup>アシ</sup>  
方<sup>アシ</sup>ハ<sup>アシ</sup>伊<sup>アシ</sup>吹<sup>アシ</sup>乃<sup>アシ</sup>少<sup>アシ</sup>利<sup>アシ</sup>と<sup>アシ</sup>よ<sup>アシ</sup>多<sup>アシ</sup>給<sup>アシ</sup>与<sup>アシ</sup>少<sup>アシ</sup>く<sup>アシ</sup>喰<sup>アシ</sup>追<sup>アシ</sup>せ<sup>アシ</sup>少<sup>アシ</sup>量<sup>アシ</sup>  
之<sup>アシ</sup>を<sup>アシ</sup>多<sup>アシ</sup>く<sup>アシ</sup>刈<sup>アシ</sup>草<sup>アシ</sup>ト<sup>アシ</sup>跨<sup>アシ</sup>坂<sup>アシ</sup>川<sup>アシ</sup>乃<sup>アシ</sup>若<sup>アシ</sup>故<sup>アシ</sup>也<sup>アシ</sup>一<sup>アシ</sup>文<sup>アシ</sup>字<sup>アシ</sup>少<sup>アシ</sup>り<sup>アシ</sup>目<sup>アシ</sup>  
野<sup>アシ</sup>の<sup>アシ</sup>名<sup>アシ</sup>少<sup>アシ</sup>り<sup>アシ</sup>妙<sup>アシ</sup>不<sup>アシ</sup>と<sup>アシ</sup>極<sup>アシ</sup>と<sup>アシ</sup>石<sup>アシ</sup>灰<sup>アシ</sup>と<sup>アシ</sup>火<sup>アシ</sup>紫<sup>アシ</sup>の<sup>アシ</sup>玉<sup>アシ</sup>壁<sup>アシ</sup>通<sup>アシ</sup>

まくは因にあらきの石原ちかの山から石原竈二  
口行ふ事へ一片の碑す天子隼吏といふ家太久保と  
詔と長尾寺のつかさを參り門元墓の代も若主  
なり之龜めいびく傾廢して今一ヶ寺うる多化上  
人のほれ唐草の十六石廻門圓壁係の大鳴少節  
天國文字の法花經八葉文書小室慶次云々去  
古所をくひて要のほり報音を安生の邊に移  
吹の西ゆきゆきむ氏毛秋の末のひくに従事到  
きしはく堅冰川をぬぐく事へ東のひくに近く  
日ひさうすよ／宿を食ひぬく人合の宿はほどの

萬石と云ひ其の一の丁寧を——瑞樹桃李花の寒風  
の吹き方と云ふ事多岐と謂はゆるこの山二方へ通  
つて車水は良し然もとほりとせむるつるぎの姪川  
の傍を走りぬりゆくゆき道を行き産つては送金くる人を  
見ゆく餘とゆく是れと云ふれハセシテアリ  
此に日本傳合と云ふ事ナリ西を大尾山尾山と云  
ひ余かゆく東を吹ゆる吹引の塔修にて姪川を左と  
右に走る事なる終て十石と云ふ事ノ一町半引キ  
左岸の山名曰く名山の嶺、右岸の山名曰く五人山  
四辯の方と白蛇とよ川流一面巖と徹

て緒を礼せば如く並と數似て其の事は不思ひ  
細述と厚く其の事は暮の後大半ちり草一が是より歸門八  
七度の有りたれ立里とくそて例水、入るゝ山を  
游勵させの時ハ先輩經師が近にて経師所の傍  
七疊臺化益の空場ナシト御墓が此枯木と似千子  
大悲の様を明利し山因に安生したる者も  
宝龜寺門安祥上人乞にて其の御影

四角の梵刹梵刹七堂伽藍と蓮台と四角の梵刹

周易之圖經曰此山爲周易之圖

伊豆の山より下りて大島をとどき古仙人天麿張勒送は  
切なうる事一毫も實相を失ふ事なく臺山一會疏是演勸送法  
宣経龍華ニ念用後桃李樹に接微竹花傍水畔之唱林  
音吉時昔ニ參門處仰上人こめく極て歎るれば腕  
とまゆニ參めつゝと上車し役上人身の重さうつ  
三乘なりカハシテ恒に世ノ一過滿一て山の石壁も  
御降すがくくあひと人を名づけたる者有りて  
一聲の轟して一月の風を吹く叶の皇后御恵り上人  
ナリテハシミヒ皇后の御恵多く辛合と歎感り仰  
修院より地主ゆゑに一位の官署とゆうてゆくと役上

人常危給仕の事無二人行ひ名號をすち名號と葉  
劍し松尾をすち松尾をすむ一聲は事子ハ前田也  
と達志也

一  
河内砦  
修院より西の平野を行ひ陰沢の岩窟  
三千の石像うち岩窟口被更衣し既くの湯ナリ  
一切無とゆじ

一  
倉谷  
修院山の西面を北谷と土佐古代元羽長  
多防捷止の所と人故ゆく

一  
自然泉  
山巒の丑亥を行ひ自然の涌泉ナリ  
傍へて立ると形の奇石も

一 篠掛石

自丸泉の東へと石を引く事にて至る

ト治原

絶頂の社跡をもと西ヶ原と高部原にて

治原と云ふ俗云日本の中興をも三條山門坂菜指

下葛菜妻一て蓬丈<sup>ハシマ</sup>とす原と稱く豈云モ一切在

牛原<sup>ハラ</sup>移蓬丈<sup>ハシマ</sup>と改稱たり

一行導石

山の西面に立つ五十歩

五丈余一圓ナツクの大燈石<sup>ヒロシマ</sup>と三條山門地名上

ノテ至良多様行導をもん余系行導石<sup>ヒロシマ</sup>

一 称高嶺

伊吹山の内<sup>ナカ</sup>

拾遺集

近は弘法山高山寺跡<sup>カムイ</sup>と居ゆもと、うかがひし  
伊吹大明神社 伊吹山林廟<sup>カミ</sup>とひし伊吹村内<sup>カムイ</sup>伊吹山  
流<sup>カムイ</sup>伊吹山の傳<sup>カムイ</sup>と土佐出雲<sup>カムイ</sup>と云<sup>カムイ</sup>伊吹山  
陽<sup>カムイ</sup>伊吹山の傳<sup>カムイ</sup>と土佐今伊吹大善院<sup>カムイ</sup>と云  
例<sup>カムイ</sup>伊吹山<sup>カムイ</sup>と云<sup>カムイ</sup>今里のな<sup>カムイ</sup>十五村の善云神<sup>カムイ</sup>大神  
素戔嗚鳥<sup>カムイ</sup>

日本紀曰景行天皇四十一年冬十月日本武尊更遷  
於尾張即娶尾張氏女宮黃媛而淹留諭日於是聞  
近江伊吹山有荒神即解劍置宮黃媛家而徑行之  
至膳吹山神化大蛇當道爰日本武尊不知主神化

蛇之謂是大蛇荒神之使也既得殺主神其使者豈  
足求乎因跨蛇猶行時山神之與雲零冰峯霧合曠  
無後可行之路乃棲遑不知其所跋涉然凌霧強行  
方僅得出猶失意如醉々瞻吹山乃かりと素燐鳥焉  
トトモ年此日年紀乃明文少辭々と之に代文  
以文少と之に代文一日を既了の急と戒し  
深く説くしむニ二代寔錄曰貞觀九年四月二日辛未  
遣神祇大祐正六位上大中臣朝臣常道向近江國伊  
富貴神社奉引箭鈴鏡々又曰貞觀元年十七日  
奉授徒五位下伊富岐神徒五位上又曰文慶元年十二  
月二十日辛卯授近江國正四位下伊富岐神徒  
三位々文德美錄曰嘉祥三年八月壬子近江國  
伊富貴神徒五位下

一  
伊吹庵 伊吹明神妙力傳トテ岩窟ノ洞中早  
而ノ不擇、或藏カニ神識異能トキ虎足ノ力と  
活潑アリテ村ノ落固入草のり名もけげてひり  
一百日の石塚奇情傳トテ山巒多シ

一  
伊吹三官 伊吹三刀之如一樣祀と号ト多シ伊吹神社

一  
觀音護國寺 伊吹山又ウ柏原錄トテ五十町以上抄

ノノ室龜三年中ニ除ゆ門安祥上人か其仁天皇の御教ニ  
クシニ伊吹山ノ四巻乃梵刹を建立シ所謂觀音寺  
はも寺を平子長尾寺ケテト南子本尊トシテ所謂觀音寺  
基乃ハ賞行基ヶ山み登リ一寸而西乃ハケト松木行  
基ノ光暉ノ行基靈不アキ半世後ノ則御者乃佛と  
造山洞ニモ色ヒ妙極詩別向寺の本尊ケト也記曰伊  
富美山觀音護國寺ハ四巻乃は最勝乃梵宇ナリ湯  
成天皇伊富美山鉢育護國寺乃勅額を仰り法號砌  
天皇僧綱職乃端首至當國長國庄鳥羽上卿を賜シ貞  
和二年丁亥寺と今乃ハアメノ移リ一丈御所本道寺方秉葉

大原判友抄時持綱和田入道同式部卿綱安浅井三代  
乃城主相續ノ一山之歴也先祖追尋の為及  
應永十甲申の年ノリ毎年は卒于郡の讀經をすハ寄  
附のち以日、信作にて堂舍佛閣薨トナリセ堂伽藍の  
靈地也ノ如アズミ田信長復升を以テの附向寺の靈  
在破壊ノ既山ノ向し也トソラノ事居多カツテ志  
桂矢ト歴代乃け物志鳥有トナリ終後太閤充吉連立  
一山林境之内陸地トナリトシ、今ふ本堂八方に面リ  
古芳三十カ院至シふ今より、十四ヶの坊ノ並にニテ所  
須化乃第十二アヌアノ此れノ鄙修ノ死人ノア

近江伊吹山佛の事。國ノ傳と三代史錄曰  
之慶元年十二月丁未自己申詔以近江國坂田郡伊吹山  
護國寺列於室額沙門三修申牒備少年之時落髮  
入道脚歷石山莫不周盡仁壽年中登到此山即是  
七高山之其一也觀其形勢四面計絕人跡希至昔  
日深草聖皇令建一精舍修藥師念佛三修居止以  
降歲月漸積堂舍百數誠非空構唐幾靈山望請天  
慈賜預定額故<sub>延</sub>其所請云

一 伊吹山行四善寺乃之極處也  
立于町口ノ右ノ五方音<sub>ウ</sub>ノ觀音護國寺と曰くニ席

門の開基たゞ左仰古者三百坊<sub>ウ</sub>今もううち坊と  
存れまじと思ひ院と申す今は寫す

一 豊巌護國寺

相多<sub>ウ</sub>ノ三里以北大之原村に在

一 おほ吹山の中にて經<sub>ウ</sub>四ヶ寺めを一だれいあらずか  
あずむし供<sub>ウ</sub>ニ深妙つり安基<sub>ウ</sub>めちふて立室室器  
多<sub>ウ</sub>法國西多<sub>ウ</sub>十三佛<sub>ウ</sub>國西多<sub>ウ</sub>曼陀羅二幅巨尊金  
國策<sub>ウ</sub>五佛古<sub>ウ</sub>五十坊<sub>ウ</sub>と<sub>ウ</sub>三十つ小佛<sub>ウ</sub>五佛<sub>ウ</sub>

一 太平院護國寺

伊吹山下より上り毛山<sub>ウ</sub>と申す四ヶ寺の中

トテニ除山門安祥上人の元墓<sub>ウ</sub>にて芝仁天<sub>ウ</sub>の

六

印鑑年々 宝龜丸成年之内連々て年中ニ有  
り中ノ事急急に御多忙居たる今を年年付トシ  
一名起程江村 太平洋小ちの以内トシリニ深山の通  
道の名前をよどまつて太平洋國字北日本山に  
おなほせ 住む村のやうに山と申すと那國山  
一枝並木 上野村 住む村の名前トシリ

輿地志畧卷之八十一終

近江輿地志畧卷之八十二

阪田郡第六

まへは、手の形で、うめくらえ  
須川村 大壁本村のあいだを、土保本村のうへ  
川と書く中でもあるまへは

八  
情  
社

白山桂皮社 は二社併合川井行 王修五代後金將  
軍時代をもと舊稱とよぶの姓の姓とて初名

舊生了 因行了行了和毛上面行了毛易遂反舊生了  
さうでまくとソラ吉行もまかせ本立名行もソム中古  
の古世ノ鳥毛とたかくまかせ行も行の日久矣从も差生

うちなむくまもとをすれども又若川とよとづく  
おもての經金の草の叶代と豆絹とし人室様をむか  
えりたとへりとまの字をまくわゆる若川とよ  
へと紙も紙くとを若きとくとへとほしれ一葉らく  
きの二字にてとくとくとくとも不ぞふと稱せ  
うとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
後川と書く後川と書く後川と書く後川の文字  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

大野木村 徒川村の少ひ多井見  
八相大明神社 大野木村の少ひ多井見

そや擬兩宣等子相故日天子月天子と傳ふ歟

一 柏室風

今中山道の改修を以て古木の政事の錢の  
所付よりはおび跡の古木本を口をもと奉るは止む  
大熊上と四十九小路へ改修の餘と付て一木を立  
少室寺の跡と傳せゆるナシ今所數二十三の家  
五百引の竹材高二十石五十石竹行ナシ一木の東  
と柏室ウトリ西と紫陽町トヨトツノリと  
ハニヤ室とト古老の乞うむと柏室と見ゆる  
毎年六月即當國の祭ともニ才六人ノ間一才ハシノ割  
地の差し雪ノ敷カタシモモロシシモ其地

食あを柏つらずく草木拂リテ上石乃ち之經と  
今ノクノリよとすと云ふ事ニカシシモレモトムガ  
地モリと柏室シテ少室ナシナシ御色紙候  
○○○血に大襟ノ腰ナシト是ナリえ當國  
近江大襟ノ腰ト同ナキ法事ナシトナシ御部  
主寺門ノモリト伍田めとて輕考了入トヨシは柏室ノ  
中の中御とぞうの根行ナシト深草元坂の近し  
アマナヒセ地を多伊吹乃至丈ヒモダナシ

卷川記

一 檜室風

所付モリモ多氣味を柏原並みう下れ名にけり

かづくま山乃とその所をもよおすともぞもみら

青木明神社 柏原より山恩社是アリ

一一  
成善院 柏多津乃に天台より海道ニ至る所  
善院也と号し天台より海道ニ至る所也は一而て完  
在院傳法灌頂の室也アリ土塔也アリ寺院哉アリ  
柏多院の勅令所傳教大師昇基坐七堂如堂乃モ有  
焉ノトキ嘉慶之丙寅の年越後國平野あちの方院等  
而モテテ三百餘里所の堂院と破壊シ却モセラモ傳  
傳院も四方又いかず一裏外にて少々處のちりけ處

山西様乃住俗家園地貞寧は乍再興つゝ也ト後承  
詒諺中歲因信是也而卒ニ止焉、言傳了麻馬の妻  
贈之今乃卒し唐女少弔祐名は乍建之と云候  
東照神君同其原跡院乃強木石石とは、白ち素面  
乃方骨人立壳立木尊上而祀其妻也石勤昌歎つ但  
佛工春日乃也、是位のひも阿彌陀も五公源那の也  
アリ至國之文殊菩薩仰地表なりニ傳行ノ諸省諸處の  
木尊ベシ之不銹身丈聖丈殊リ像り天竺傳來の約傳  
ノアミテ玄奘持歸南寺以御余仰百字石立于寺之院  
八十並寺也傳石者三百餘

乃画像一幅あり。右傳法首平昂寺の石像也。湯口  
内志寺陽より。曾織田信長と仰居て傳。山石  
不圖手書も。仰て護摩を。多ち也。涅槃玉乃り  
画像及慈光大仰の画像也。來く序文の佛の御印  
の如にて火絵。も來法氏に画像。五度と。うり  
拂ふと載り。又仰て。南院。秀忠。秀代著述ノ書  
第。七。七。七。七。七。七。七。七。七。七。七。七。七。此。天台。教義。也。 楠原。秀忠。武安。吉海  
十帖。七。七。七。七。七。七。七。七。七。七。七。七。七。此。天台。教義。也。 楠原。秀忠。武安。吉海  
豊受院。延徳。二。月。三。溫。潔。也。四。月。八。日。灌。頂。也。四。月。四。日。  
傳。秀忠。七。月。初。貞。宗。忌。至。三。月。二。日。高。僧。也。七。月。四。日。  
傳。秀忠。七。月。初。貞。宗。忌。至。三。月。二。日。高。僧。也。七。月。四。日。

祐。多。忌。九。月。三。日。厚。砌。主。講。式。九。月。四。日。天。台。去。之。傳  
陰。風。而。纖。由。深。正。史。信。長。承。歸。十。月。八。月。九。日。禁。制。也  
丹。羽。足。節。左。衛。門。長。秀。羽。柴。木。船。守。秀。吉。の。天。正。十。年  
九。月。九。日。禁。制。礼。金。告。中。納。秀。秋。乃。慶。七。五。年。九。月。九。  
禁。制。也。) 仰。富。家。乃。仰。授。高。左。之。記。也

成善提院法度之事

天下安全即祈念。長日護摩不可有油。約半  
專教觀二道。不役執持。佛法事  
院領く。伎。住持外。不。主。他競望事

院領く。要。冥。贍。奉。等。不。經。持。止。半

一爲顯寧之名室故以是而之被古後事

任之例之有更以所化速の後追永年

門前く老於成石做志知之幻誕後持下ノト付事

石修ノ時可有也之仍如仲

度長十三庚申十月四日

家康仰印

角原日光印門跡印と死印

十王堂 日光と成善院と高と少野村と付事

多佐江十王堂小雲昌正印

一長命寺 柏原と河内至山と今様とち勇印家  
和子十一而號寺岡山岳山和為同墓善庫氏

一長福寺

柏原と河内至光山七福と多良和善庫印

四束羽暮善慶乃作之西も乃和多所行と多良地  
曰大乃萬峰山の東と至武天皇天平九年丁未固多乃和  
多良と從者と七重蓋とあへて塔と水晶とほし紙と  
宝物と蓋と多良と多良と御心事と多良  
山川原と山原と多良と御心事と多良と  
号一方二町幅乃田圃乃字と呼ぶと材老農唐政  
姓多良と七福と乃地と呼ぶて和多と呼ぶと多良と多良  
と多良と本ハ夜と呼ぶと多良と呼ぶと多良と呼ぶと多良

冠四帝永泰ノ二男松平丸也家ノ諸國行脚ノ既にて  
又柏原松也と不若家ノ多ひ柏原ニ二女也トセシトモ多福  
ミテ二女別居ト一上人ト政宗トモニシテモ多福  
ちと多ひ化俊代尼也と有て豊昌セリ、婦川乃  
全義の子也、也多大く御子御四跡而已と有モトミ  
仰上便後秀以性體力也絕せりと時宗薦而蓮範乃末  
ちる)

一 明星輪ち 柏原町西ノ十町也入ヒトモニテノ吸星山  
吸星輪ちと号ス天台宗多岐寺後也貞隆乃完吾<sup>14</sup>相  
貞也ト名也ト有矣萬葉山乘傳教大师一万之紀乃作也

一 狩野友松ち絶品也松井尚前也リ女栗谷御子也  
明星輪現水 吸星輪ちリ界内ノ門也古也乃ノ前  
又民家草堂傳所也吸星町と号セレキモ古也柏原町  
、即ち

一 妙法ち 柏原少卿也古字也古体初善達也  
牛込天王社 妙法ちの男也ト有

一 永明ち 口折少卿也深宗英壁瓶鳥山永明也ト有  
と有考聖觀音也ト有

一 布瑞ち 口折少卿也河岸山布瑞也ト有天台宗布  
考佈院也ト有

一長壽石像

布湯乃安內

物事の見方

也何せり哉と五年をしらへば後セ君の石城と号し  
もよそを改モ二号御上名前生石面ちうらうにて文書  
之れ数千年の古物とぞきう國有之

一  
幕宮八幡宮社  
同前  
列島と支那山地宮社

先づ御家を知る。高野永源の事也。

一  
外  
之  
事  
以  
安  
其  
國  
而  
不  
以  
私  
之  
也

賄予與曰。吾子以清高志素。在鄉有乃事也。

一  
少原ち  
曰く、少原、諱也。高宗仙薨、少原、悲之。

家極可喜  
日夕為一句家而不能已矣

教科書の印字は、一句を西から東の方向へ翻訳する

勝業子曰新之子曰弓

一 安立吉 口訛子 甲辰

西観寺

王  
始  
松原町三二町半  
入西画り中日  
俗傳云 佐武天守は  
津幡をと長セハテ  
元  
治廿二年正月  
京郊西ノ山  
松原城主  
かく漢絵也

柏原ノ訂正ノ事ニ及ヒテ可トシ也  
後乃武、曰柏原陵、桓武天皇之山城、圓紀傳耶、山  
況記曰、伏見山、松原ノ中等也。為王廟陵也。曰霞谷  
而伏見山也。即是柏原為桓武天皇陵地。熟玩式條北  
城山槐記所在而察當地圖則今伏見城山古御  
香大龜谷、總柏原陵地也。然則陵之所在為城中央  
思築城時、陵壞必矣。後世以城山古御香等名目  
茲與、終失柏原大名。其餘類聚國史仁詔記正  
史実錄と見ゆ。桓武天皇乃師陵之山城ノ圖有  
之、と顯然矣。將くハ柏原成焉、提幌ハ桓武天皇勅

一具行卿墓 柏原町三丁堺口右側傍花塚と  
号を源中納公具行公乃墓也。されど此地の名を  
之は花塚とふる者皆圖より之を後々に太平地  
曰元弘二年源中納公具行公とハ佐木氏達判友  
通奏疏改を監固使を僅食下す。近の柏原  
町新まつまえに揮便道走してアツムル。自已エ  
くれタリハ古書也。とせんのせん。御道もあらゆ  
山塚也。一村口下。而葉とゆきそへる。其  
安乃上。ちかひ。せたまひて砍とくとをあくと辞世

乃頃レニテともやむらは 生死逍遙四十二年山河一草  
天地洞ヘシツ

六月十九日某と書て筆とぬきと刃をともとてほふ  
くらべへ田児六郎左衛門尉タタキとおもへも  
御首ミサカへあこがよめりとくらへぬれまく太平地タヒチと云ふ  
よせは具行タケル四十二歳セイとひが邊ハタケ云々神カミ仁ハジメ曰ハセマツ前  
曆二年具行年三十八又曰正慶元年五月下向閩東  
甫和ハタケ二丈六月五日タツク具行生害十六年の後  
田児六郎左衛門建立寺所ミモロギ法花塔ハツカタと名むらも

主所は庵の傍ハタケにて彼造善の者一石イシ法花經  
てまつタマツ土中トコトコに筆ヒツしむすへばたけの名爲  
逝世の石土イシと名づけ

一 滅魔寺 楠木政典シナガタマサタクちゆつ入谷スルヤの間マジ行ハシて  
傳原院ツバタケンはまくらハマクラと千人チヒジをもめきを極ハシマツる大威  
法身堂ハツボウドウと呼ハスすとて滅魔寺尼ミモロギ由卒化ヨクサクガと多行タダハシ  
博養ハツヨウめらかハラカく永ハラハラに三年サン行ハシて博養ハツヨウと筆ヒツす  
アツシタタタタタタタタタタタタタタタタタタタタタタ  
多行タダハシの善統センブすうくシウク古ハコタタタタタタタタタタタタタタタタタタ

李集子

一  
葛之論記

柳家之忠長(三林)行記

彦馬、左角古事二叶四方の地とし、多く田地  
にて開拓二十万頃の地と云。

國雅集

大成集

君の代の文もまた、その代の文化がどうなつてゐるかをうかが  
一長久亭の跋 松原と対面の中房を行ふお行せ  
寺伽藍の地にて、其の山森とすこしもそよぐの一處と  
やまとをくまづかの方の民家とそろそろはなへる  
一 郡園序の原 松原と対面の中房と

詩經序

卷之三

一 玉井 防風等の薬を土俗より白濁水とよんで  
之を數字名を玉井と云つてある。此處多く同く玉  
井の名とあれば木口は木とふち土俗五傳下古者草  
利左近吉と考え難き事多し。故に深識いたる  
毒物との誤認に余既不くして本妻四子の娘アレ  
トが死後、無事かの湯ノ宿ナリ。人と自太の  
沙、事も無地と想女谷と云ふ。此を以て唯り化粧  
白粉入り水に入り、白濁水と云ふ。此  
長竹子等小糸を透せし、医布して仰せられと云  
う事にて、解説書の多下し病院のもの

せゆ所より車にて少林と被りて右へ入る等  
かくは一里二千町

蘇生ち峯也す、壁の序より原野より其代古芳等  
御山蘇生すとて一寺うちつゝきゆり減て寺  
今地をの石像ある是古考め蘇生すやむ等  
多也あくハ景州の豪利左義柄ゆゑ、今もソレシ  
矣广王の情すとてニを娶はすゆゑといへば俄  
鬼と云ひてとも妻四子娘をとせし自車を  
送り至るとのてね女とちうて車と云て紀伊並せ  
の温泉すむいくほこの地と云ひし而の事と

経も地あり歎く経度祁峰とあらず、地を共て  
曰走りとしろてたゞ引ハ法ノ御ノセベヤ京とぞ、わ  
アノ御とて心はせ、牛の小車と馬車の轔木といふ  
トミノ四毛の御新御もねくと後とい無事もま  
ふ早一て善きう癡子金一て古考の娶とたる再び  
たれやマシイ佛國と建主一は也參とむと  
即座の蘇生すとて一經幢在巖の左院たる  
ノ庵をもととし、其柱を以て今後地主等  
のいふをもととし、其柱を以て之モ不<sup>レ</sup>ヤ

筆跡ううしんへま無す四、

時西は西行入菴も跡　柳生の中庵御宿の谷に  
アシ土佐五代上西行上人研井泡子の事やにて不思  
比詮義をうけはす草とて川の入をかみの雨  
の時もと經りしなくひ雨はとひそく西行の  
経行の國體むすめの心め吹かれとひ雨はみ  
名トハミル

一  
長久うち村　柳原のちうくの原ゆれとよきを  
うと古ちたせ巡しあふ山もろよとよき行いと  
今すの名となまくモ競とし原ゆれとよき行

一  
義濃与國の界へ並數三千引カラニ引と義濃ノ國北  
三千引と近江ノ國也と至濃の國カラニ專役御宿と云  
蓋壁つまと會つて義濃近江兩國の有廢あるとよき  
のうとすゆくふり半身とおひさみの湯ありとよき  
さんとくらふと少海と一つ多カラ引のひとよき  
ひと近に泡うて泡と泡引いたげくと見ゆる  
が近に泡うて泡と泡引いたげくと見ゆる  
まち寺地は四寺の廻学を湯宿同名りと云ひた  
今とくとくと湯うとよきと一派うち多是近に

山嶽さんくくらむとこをうとまえ月見一峰東風石原  
至りへ山にあらの山だけくつるとありと  
ひそよそとくも美濃山にの山嶽くくらむのをりと  
みや

一 桂河内村 桂多乃あらうむとは里を御邊おとす  
らかと桂村とよ谷合たにあのまつと山の村とよと村有  
袴はきと千今玉袍袴はきと着とて桂乃村と移シ通スルま  
げたまうと傍わけ石舟いしの下したと山の里さとと差シて  
邊城へんじやと點てん首しゆと無な坂さかと死し紀きとほん

名寄

好忠

桂山と山の中通絕ちゆうと我身わがく秋あきの事こととかうふき

丈木集

袖室

天晴風吹あまとあく夏なつの日ひ桂の山さんと雪ゆきのつけ  
宝極ほうごく方角抄

袖同わくどう師

高たか石いしと桂けいの松まつと山さんと野のととくらは

奇宮家集

數かずとて桂けいの松まつと山さんと野のととくらは

丈木集

修穀

杜修桂もりけいの松まつと山さんと野のととくらは

風穴

桂けいの村むらと山さんと野のととくらは

夙乞とよ

一 龍源寺 河内より入るの右より黒懸山  
竟はすこひけを齋場流るゝ往古の事も未詳其  
ノ事中一遍上人の高塗河内多度善提所名ニ上  
一 桂川 源も桂川の事也乾と源と而立村  
石橋水川と今一碑井川と今一源入今  
一 上平寺村 畠川村の西面うち坊主百姓にて御寺千石  
そりのレ村

一 上平寺 则上平寺村を今總之輕井一宇而れを金龜  
上平寺号一高極高清高峯二代所住乃地也今一櫻井

記かくすと鹿の城シロヒコと上平寺ノ事也  
一 小倉寺跡 上平寺の西に之確うるゝ殘跡也

豐地志畧卷之八十二終

近江輿地志畧卷之八十三

坂田郡第七

一

藤川村 春照村の東南に位置する福島村の一里半

北より西へ國御通義濃國界線次第同乃並川之字

名也水產甚穢多魚乃烈祖成傳之慶長乙年

九月考之 神祖出生川の當と曰ひ下と國名一說

乃也 東照神君降焉を仰給し移すをす

一定家鄉寫居跡

藤川村之今在所本氏之

一

定家鄉寫居跡

藤川村之今在所本氏之

七

了。彦名是家鄉在源中。二年以北。寓居之。山。梅  
定。亦石室也。少。少。少。少。少。少。少。少。少。少。少。  
百首。山。山。山。山。山。山。山。山。山。山。山。山。山。山。  
百首。山。山。山。山。山。山。山。山。山。山。山。山。山。山。  
山。山。山。山。山。山。山。山。山。山。山。山。山。山。山。

此。人。贊。也。

### 蘿川百首

春二十首

國路早春

桂中納高定家

那。一。室。乃。蘿。川。春。未。至。而。深。夜。微。雨。下。し。し。し。

湖上朝霞

朝。行。け。そ。る。の。法。八。主。宮。院。多。風。吹。く。志。の。浦。風。

霞。隔。遠。樹。

三。輪。乃。山。先。里。多。し。初。將。門。道。之。二。年。乃。多。之。

羈。中。圓。寫。

旅。里。山。多。村。將。衣。多。多。多。多。多。多。多。多。多。多。

隣。家。竹。鳴。

山。旅。の。園。生。迎。引。不。我。作。鳥。之。之。之。之。之。之。

田。也。君。來。

小。山。乃。移。之。處。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。

野。外。殘。雪。

春日望と山日の名所消えゆくゆゑか神も

### 山路梅苑

色も香もさうてさす下樹乃毛白の香色の喫りや

### 梅薰和風

匂ひ本ぶ核と名す所、香と呼べるをあらゆるやう

### 水邊石柳

年月に移りふうすれ相転水引川流東乃世のちか

### 雨中待花

うきやふのまゝ萬花のやのよめ候事のう

### 野花止人

玉立風姿を吹花はすそハ千代と呼む乃説人

### 曉庭薔薇

いづれくは早のきくく吹風と若せすくも花をさうく

### 遠望山苑

色まづまことのやうまくんじらむ傍ノ山の端

### 故郷夕花

よどちゆれな處のさうと故里とたれはと兩人とて

### 河上春日

行基乃處とひみづ門高松別江月

春乃夜の八重の多ひぬるをなれじにりはく、まらん

春花隨風

北風の吹きそよぐにむくらんが此の事の事みとせ

櫻急絶冬

移住多ひ多めとみてや向ふ山吹乃それ

桜中音者

東川修道とおぐな桜乃音のさうと別れしもべ

夏十首

仰範源流

秋乃暮の枝とすりれ音とぞとまれて這のひづき

初風の鳥

きのくに風互々都云まくわをくとすりたま

山家はる

秋里を望むてもゆる山としゆくたゞとくゆく

池鶴萬葉

四月の月に山吹の音、音を刻てかく

雨露吹大

六月と煙とみづけとくねむ乃高山の天のや大

盧橘驚夢

神乃音を花うちもふよはせども絶てばれかく草のあが

夷立圓面

俗人乃やひたれりや五月ありすとくに夜のどり

節夕衣裳

伏野のとくやうひも。誰うたりれ築き(字多くまわん)

洞庭堂火

日暮そひてとく方色も改し谷をやくのえりうる

行説久立

向西よ神もとぞく移ふゆりゆく行遠方のくと

秋二十首

初写朝風

被事ぬとくそりゆ。生れ朝風のうせれふうよ

國風七月

浪川文月のふのく望ねせとむかふや金くやうん

野亭夕森

秋翁よとくやうの又やけいとくやうてくの岩くうせん

に急壁之森

向やう森のあみのほくとほりへいとほりか人

山家抄序

始風のせらよ西へ出る所とく山の里にあづり

海上待月

涼冷了、秋草、花と翠へもあい連へるひの日

12 月夜月

神らしきものに月の夜風とぬれり月をまくらみ

深山見月

若葉みてぞくみ僕そとすりも深山の月を人やとい西

草雲夜月

武夷峰くはくめを此處をやゆるのあち前却月をこなす

閑夜宿月

お坂をひづらん日を拂てふえ紅日の闇よりそむく

席聲夜友

山里の行き外の我友もすかず原ノ又ハ乃るよ

田家持衣

落葉のかくての山田ぬけぬけ煙そりそり夜うつむ

石波秋勞

夕方の音うし続の湯田川我友舟にりやりやと

松風獨跡

空松壁と木の下を拂ひ風すてもしも止む四野の松風

難下才里

乱世の音うめの聲のしらはでなく色をもひつむ

紅葉の移水

山川乃叶多て晴れし紅葉あらむ移水も色す

山中紅葉

山中もあられの風れとみや葉の變ふし不とあれど

落葉槿花

落葉ノ槿花たるの白落葉も有りてひじは紅葉不のむ

川邊白葉

大井川ノ白葉の花の色をうつらひて白葉也

獨情暮秋

又へりとあるてアリ葉また別く物すありの事と

冬十首

冬初時雨

冬之けくさアリてけあひ青修<sup>ミタマツ</sup>神<sup>ミタマツ</sup>月<sup>ミタマツ</sup>人<sup>ミタマツ</sup>也

霜雪茂葉

移葉おほ庭の紅葉葉と云はれかのちと移葉若乃立葉と

尾上園露

ねりとく葉の葉と立葉て风ノ引出し立葉<sup>スル</sup>叶

右章物書

音<sup>ナシ</sup>邊やう山邊乃布<sup>ハタケ</sup>の波<sup>ハタケ</sup>ノテ<sup>ハタケ</sup>音<sup>ナシ</sup>の初ゆえ

庭雪厭人

我門をすまし今こそ此の言ひ方へとすまひて

海道抄

佐のほり松もんくゆる事すくゆるもとすみ人

水歸宮蘆

芦の下か里てとびにの入は月井新しきは

湖上千鳥

やつは月はのさとみうづれのまよ

寒夜水鳥

ひそひそれを風のすずめと野のあとねおぞめ

重喜浮冰

今朝むらか波浪の初花し若比歌の

急二十首

初等経意

思ひあたる里人ふくい國一多數のだらうと

剛聲思意

秋うすと秋の名うりしかけとく虫の声うりて、

恩讐昵意

因きもくして、下千葉の色つきのあかり

祈不應意

行くりすまぬ日暮川のまゆひねえまく

旅宿道意

立田川木ノ下の下村の松門山に宿す

重歎嘆意

今宵うしゆの山は宿すに時もぬるをせしめりを

序無事意

移居を隆く高神を仰ぐて坐すうつま人跡し

遇不道意

とほんせうやくの多きをせばうつのてぬひけ

絶不知意

わゆ草人代すう乃くも多きをかげとす

綾真偽意

誰うまたとれの偽りかくはれんがくをあはれ

其經年意

竹けくゆり本のふれぬゆうすきをむだ

五事極意

おみゆくゆくとすまくらひの極力とあれ

被所滅意

色あくふいれちゆりふ縞のゆくかほるがむ

逢中華意

通豈き井水にて事にひきまくらすも草の葉

依頼書

さうぞよろしくありふるごとく年のとれ表のをしが  
絶人名意

假物はけりうりトヤシムんがものかいたてぬ事と  
後門帰意

すりしゆれ事の門のさくわくまくゆきうくらはぬ

正銀経意

とくに東海十本とくしや事はる里のちくはくく

箇遠道意

とくつや義海ふうあらみくらうとくわす中はせひ

忌経形意

うせんたのりさととほははのをふくとふきくまく

雜二十首

曉更夜意

ゆすふきぬきゆくとくおとせきわくすまくは

尊暮松風

枝とくとく我のよしむの松夕月のすくう一室

雨中帰意

とくに風雲あはれの歸ゆふかとくあるは意世のゆ

浪洗石苔

早瀬川若うの原のあめふるい緑の色をもつて

### 山中淹水

雪消きゆらのやふ色あくまのと高瀬のあい

### 河水流佐

加山木は瀬川の名前本のあくつかとよもぐり

### 春移移

朝移す夜移す移すとおもひとねすり

### 圓移行

行合移行うりゆふとおもひとねすり

### 山家ノ元

着物れど四方打革本はあくまのあまき業のうと

### 山家入絲

夢を思ふやゆくあくまのあまき業のうと

### 海路肚合

あくらりやかやうお船の肚合あくまのあまき業のうと

### 月羈牛友

久留美富うとくし輕なうと高瀬明のあくまのあまき

### 詠寄夜雨

詠歌歌うとくし輕なうと高瀬明のあくまのあまき

### 海道曉之

豈ひやうとひやうと曾ひうるおのまのまのまひよあら

寄稿文書

まとうりへやうねあるまつた。身をもせよとあめんとく

寄草連詩

引替へたりへやねへうけやへうけやうけやうけやうけ

寄草連詩

かまはせやのをの極きまよじきし爰はれへやゆへ

逐日懷童

まの月れみ多日あよまわいあくみじいとくとく

社頭讐言

むろとう神そはあやハ然やあら明うし民やとくよ

一善園法 長島山う根村内村吉相上村堂吉村吉也

そり

西む

東む

向む

万葉も

春水川

ほ二ひとうハ山ち山一も山高むを南大陵水

村の西を縦て村も北を南あり一方於平村の西をと車で  
なまきて梓川と合流井川となり翠浦川となり御父ノツバ

やうもまきとて楊虎城のあとは縣おなげ等もまを處て方  
聖寺村の西より合して一派すある

一 堂岩村　志雲山の南より出る也高井山松雲寺の堂有

也の名洋上松雲寺の條下有(タリ)

一 寺房金光明神社　堂岩村山より出る松雲寺圓廣國社也

知府もろかにて志雲山村大原村の寺房金の社同前也

空氣山年四月初午の日

一 極樂寺　堂岩村山より出る松雲寺の堂有

支其北山より天平宝字六年夏四月三朱安澄上行化江北經  
過雲林樹上系雲霞雙光彩散亂安澄見未嘗有攀危跋

峻尋光求之至峻谷巖穴而得觀音大士肖像不任觀喜牒行殊  
伏負焉而即于西洞半縫艸庵親奉香火民間遠聽自能傳  
縣自縣傳州感應如卿音飯敬者憧々不絕遂成室房山号雲林  
寺名東光極樂神護日京雲中德音藏號稱德帝勅建  
佛殿及僧房二十六院寺為祝固道場其壯觀彩瓦耀天盡棟  
涌地反宇圓負盤環谷中故俗呼其地名堂谷其名于今存  
仁和丁未年圓珍僧都昌建龕藏於寺南園而經繩穴惡贊  
隻者川臻也唐久中後烏羽院寺行名招山曰帝不豫召醫  
亟無効一夜夢一僧來告曰昔有法術克治帝病宣問法術如何  
僧曰以法華六萬九千三百八十二字書于其數小石塼方墳寺故

禮帝病急愈帝曰師阿誰僧曰雲林山僧也帝覺而問右曰  
雲林山大士靈應甚夥夢中僧恐大士之應現于故帝感悟而勅  
教菴阿闍梨謄寫一字一石法華經定于本山南園塔是乃帝病  
不日無瘳帝歡甚詔匠作佛園僧房復舊別公田禁園為寺產  
自是又稱大乘峰佐木秀義高綱文字在誠傾心寄附腹思造  
教言僧都法燈猶不斬矣嗟夫時反周論狼烟烽始殿堂悉灰  
燐然像獨在里民有弱小數力再攝佛園永正中穿踰欲奪  
像去像重加鐵石不得舉終去元龜元年又為兵火焦土也厥後結  
構不及古艸屋傾臼聖像朽弊雖往夫回顧雲林歎  
首年豐亨)痛今日否塞況又谷中者且歲天正

庚辰年邑吏某等癉心同志而就同基斧荆榛架一  
宇而安置灵容然呂殿告成予某等告之曰夫殿宇  
成壞世而有之其壞也一惡至也其成也一善至也云爾云云

失一春天正八度長雲林  
山住僧之疏記寺記也

一高禪寺

一二社權現社

口アラマウテ極多モルハシタリトモ

河口の古傳お傳は西元年中作成の院鑑

予不以爲子小也。門之玄屬烏不之知。惟其子

至正年中よりはいふる事御前とあらわす所

社の事よりと雖、國の儀は既薄外も終國籍のとくに信長

がひきゆけたるを知りて是よりよりかゝつて奉焼おこなはし社

ひきゆけられ

一 坪江萬師堂

門柱よりは萬師堂なり也

一 梵字石

門万萬師堂の侍よりおむすび萬師の作なり

一 觀音堂

門柱よりは十一面觀音の像外神故う作

とよ原の清少納言刻しと曰え龜四年觀音城庵秋元志

一 平松村

萬字堂ありて是れ

寺の事より萬字や名前が方次と見え全體お力等も古風の所

ありて作へあるものにあらりとす

一 北方村

トあると村のあらわれ

一大麻村

ウカ村のあらわれ

一 郡房倉太山神社

大麻村より多方面に亘る村多房

倉太山神と曰ゆ事、奉行の名下ともぞも

一 了敬寺

日村より清吉寺を主とするものあらわ

一 志賀近村

志賀村のあらわれ

一 宮房倉太山神社

多方面に亘る多方面に亘る村多房

倉太山神社乃ち志賀村の社

門柱より事詳て書矣

の多きを以て

一 山室村 大森村 西山口村

一 年从天王社 山室村

一 沢山門堂 三山村 小倉山山頂より天像ハ以降大師  
此後

一 宝安寺

日付未詳も正本佛光寺に於て

一 有馬村

一 常性寺

日付未詳も正本佛光寺に於て

一 有馬村

一 常性寺

日付未詳も正本佛光寺に於て

一 油里村

一 年額至社

一 林村

一 茅印意

一 村木村

一 琴是明神社

村木村未詳年月未詳

一 江芳臣等の著手未詳年月未詳

一 琴是明神社

村木村未詳年月未詳

一 有馬村

日付未詳も正本佛光寺に於て

一 廣勝寺村

日付未詳も正本佛光寺に於て

一 恵濟社

庵勞作社とす

一 萩之村

山室村のやまと村むち萬石のあい

ちと

一 理金山双林寺

吉田村の今竹寺をめりぢちの改

一 合と及ぶるときもはものちひく何きの年う廣志

一 おま叶をとみ佛像は色とほどの佛は光の仰御とお経  
の持たばれり

一 黒田村

やまと村の高村や方村志喜村山喜村

一 以上夕村とづ

一 本河村

はせかわくら村の山口とよとづ

・ 遊遊主里名主下見

輿地志畧卷之八十三終

